カラゲンキ。

佐乃海テル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カラゲンキ。

【Ｎコード】
Ｎ８２５９Ａ

【作者名】
佐乃海テル

【あらすじ】
俺は気づいていなかった。当たり前のものが当たり前かどうかはしっかり知ってからそう思わないといけないということを。

ほらよく言うだろう、バラエティ番組で過激なことしている人に限って実は大人しいって。それを凡人の実生活で証明するのは大変難しいことなのだが、それに近い体験を現在僕はしているような気がする。

中学からの同級生に藍野っていう女子がいる。中学1年から高校2年までアホみたいに同じクラスだ。クラス変えっていうのは、『あーっ、あんなに仲良かったのに……』という悲劇も、『うっしゃ、消えた消えた！』という喜劇も同時に起こるわけだが、奴との位置関係というのはそういう演劇とは常に無関係だった。こう、プラスでもマイナスでもなく、普遍的なものとして4年以上そこに存在してきたものだったんだ。

もちろんそれなりに親交は深かった。俺はある程度藍野のことが分かると思っている。藍野も俺のこと、ある程度はわかるんじゃないか？　そう思っていた。

性格？　そうだな、話していなかったな。明るい。とにかく明るい。拍子抜けするぞ。なんでこんな場面でも明るいのかな、と思ったことだっていくらでもある。まあ『思い出せ』、とか言われたときに限って思い浮かばないことには慣れているんだが。

朝は
「おっはよー！」
で始まり、夕方は
「じゃーねっ！」
で終わる。こいつには残念なお知らせとか無いのかと思ったさ。休

み時間に俺に話しかけてくる藍野はいつでも、元気はつらつとしていた。ブックオフが中古本を扱っているように、海の家が夏しかやっていないように、こいつは明るいものなんだと思い込んでいた。

こんなことを思っている時点で、俺は藍野のことを全く分かっていなかったと今頃気づいた。

朝のホームルーム前は誰もが仲のよいクラスメイトと話を弾ませる。もちろん友人も藍野だけなんてことはない。俺にも男友達はいる。その一人、夕枝が突然話題にしたのがこのことだった。

「お前さ、藍野と仲がいいよな」

「ん、まあそりゃ嫌でもなるだろ。5年目の今年も同じクラスだからな」

俺は軽く笑った。次の発言まで本当に無神経だった。

「そうじゃねぇよ。藍野が仲いいのはお前だけなんだぞ。お前にしか分からない問題聞いたりしないし、女子と話すことは話すが、お前と帰るときのようなあんな明るさは見せないんだ。藍野にとってお前はもはやただの腐れ縁じゃないんだぞ？」

そりゃあ驚いたさ。藍野の趣味もさながら、今の今まで気が付かなかった自分にも。

「正直言って、普段あまり人と話さない藍野のほうが本当の藍野の性格だろうな。あくまで俺の印象だが」

俺は何も言えない。

「ここまで言ったんだから、こっから先どうするかくらい自分で決めたらどうだ？」

夕枝はポン、と俺の肩を軽くたたいた。その表情は少し緩んでいた。

確かにここまで言われて、自分のこの後も決められなかったら少

し自分でも情けないと思った。でも何が情けないのか分からないし、ただの腐れ縁で無いならなんだ、親友か？　恋人か？　その間か？

俺がそこを勘違いしたらもっと情けない気がするんだが。

ただもう一つ引っかかることが俺にはあった。

『普段あまり人と話さない藍野のほうが本当の藍野の性格だろうな』

マジかよ……だとしたらブックオフや海の家にたとえていた俺はただの思い込み馬鹿じゃないか。そして……藍野は俺に毎年、毎月、毎日、毎休み時間、毎通学で俺に元気を振りまいていたのか。もしかしたら、藍野にとって不機嫌だったり悲しい日はあったかもしれない。いつもそうだった可能性だってあるわけだ。そんな日でも、それでもただの腐れ縁だと思ってる馬鹿な俺のために精一杯のカラゲンキを送ってくれていたのか。

でも。俺は決めた。

馬鹿の俺にだって今できることがある。

あいつの気持ちを受け取ることだけ、いや、受け取るという大きなことをできる。

あいつの元気を当たり前だと思っちゃいけない。あいつが俺の前で明るくいることを当たり前だと思っちゃいけない。当たり前だと思った瞬間、普通は素晴らしい物はすっと消えて言っちゃうもんなんだ。でも藍野は消えなかった。当たり前だとずっと思っている俺に素晴らしい物を与え続けていた。

目の前に見えることは実は違うんだ、当たり前のものは実は当たり前じゃないんだ。そう言い聞かせながら終礼のチャイムが鳴ってすぐ、藍野のところに向かった。5年間、自分から藍野のところに「帰ろう」と言うのは、今日が初めてだった。

（後書き）

短編第2弾。
本当に、短い。とりあえず恋愛に入れましたが。
ご感想・ご意見・ご批評お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8259a/

カラゲンキ。

2010年11月18日15時04分発行